

# 柳田社会科の成立について (第2報)

森 本 正 巳

## The Establishment of Yanagida's Social Studies (2)

Masami MORIMOTO

### は じ め に

昭和28年6月1日、柳田国男・和歌森太郎共著の『社会科教育法』が発行され、柳田社会科の理論と内容が確立された。これは教科書発行への準備が整ったことを示すものである。ここまでの歩みをまとめると、

- ・昭和22年10月 『社会科の新構想』 出発
- ・昭和24年11月 『社会科の諸問題』 模索
- ・昭和26年10月 『社会科単元と内容』 第一次単元の成立
- ・昭和28年6月 『社会科教育法』 第二次単元の成立・理論と内容の確立

6年間に渉る柳田の社会科への情熱と民俗学研究所の所員の努力、成城学園初等学校を中心とした協力校の実践が実を結び、柳田社会科は世に問うところまで発展してきたのである。そして以後の歩みは、

- ・昭和28年8月 小学校社会科教科書『日本の社会』文部省の検定に合格。  
2年用1冊・3～6年用各2冊・計9冊。
- ・昭和29年1月 小学校社会科教科書『日本の社会』実業之日本社より発行。
- ・昭和29年1月 『学習指導の手引き』実業之日本社より発行。  
教科書『日本の社会』の指導書である。1～6年用各1冊・計6冊。
- ・昭和38年4月 『日本の社会』発行をとりやめ姿を消す。  
小学校社会科教科書『日本の社会』は、昭和34年版まで出版されたが、以後はそのままの内容で印刷され昭和37年まで小学校で使用されたが、昭和38年4月より印刷もされず姿を消した。

以上が柳田社会科の辿った経過である。本稿は『社会科教育法』の発行から姿を消すまでの経過についてまとめたものである。

### I 『社会科教育法』と第二次単元

『社会科教育法』は柳田国男の意図を汲みとり和歌森太郎が執筆したものである。サンフランシスコ対日講和会議によりアメリカの対日政策も変化し、それに伴って各方面からの批判が出されたが、教育界にも種々の意見が提出された。殊に教科においては社会科に対して厳しい意見が多く見られたのである。このいわゆる逆コースの風潮に答える形で『社会科教育法』はその所信を述べている。「われわれが戦後新しく教育を立て直す方途をいろいろまきぐっている間に、アメリカのソーシャル・スタディス、今日訳されていわゆる『社会科』となっている

ものを知ったとき、一応これが日本の前途の発展にとって、意義ある教育であることを感じとって、その内容を研究しようとしたことは、まぎれもない事実である。(中略)要するに子供たちに『世間』に関しての認識を深めさせ、『世間』はどんな構造をもち、どのように個人々々に対して働きかけているか、『世間』のよって来るところはどういうところにあるか、あるいはその『世間』に身を処していくにはどういう態度をとったらよいか、というようなことを勉強させるものとしてうけとった。(中略)それで社会科は、日本の教育界にまさに正しい方向を示唆するものであると、非常に好感をもってうけとったのであった。だから、まったくの押しつけとして何もかも甘んじて受けて、不承々々にこれを実験的に試みてきたという類いのものではない。」<sup>1)</sup>

和歌森太郎が柳田の社会科への発言を十分に踏まえて、社会科批判に答える形で柳田社会科の方向を示したのである。

次に注目すべきは第二次单元である。昭和26年に発表された第一次单元を土台にしてこの『社会科教育法』の第二次单元へと発展したのである。その間には柳田社会科の実践に努力したいくつかの学校があったが、谷川彰英は次のように協力校を挙げている。

「中心校 成城学園初等学校、協力校 川崎市立西生田小学校、秋田県大曲小学校、福島県荷道小学校、茨城県筑波第一小学校」<sup>2)</sup>

以上の学校の実践に加えて文部省の社会科理論(昭和26年版学習指導要領)を参考にして、理論が整備されカリキュラム編成が進められたのである。

さて、カリキュラム編成の原則については『社会科教育法』に詳細に書かれている。そしてその要約が『学習指導の手引き』<sup>3)</sup>に示されているので、以下に要点を抜粋する。

- (1) それは絶えず現代またはここでの問題であること。
- (2) 事実は少くとりあげて深く探りこませることが必要である。
- (3) カリキュラム全体のあんばいは、日常生活の体系によって組織されなければならない。いわゆる学問的体系とは別に、世間そのものの構造が既に体系的な秩序をもっているのである。
- (4) 社会生活の一つの機能に対し、他の多くの機能が結びつくような扱い方をしなければならない。
- (5) カリキュラムは学年の進みによって、継続的・発展的に編成されなければならない。

(傍点筆者)

この5項目の原則を見ると、(2)(4)(5)など検定合格のためへの妥協的な面と受けとられやすい項目もあるが、柳田社会科の特徴もよく現われている。それは傍点で示した二つの項目である。民俗学者としての柳田の立場を示したものであり、また『社会科の新構想』以来ことあるごとに述べてきた点である。

「柳田の民俗学は時間的にみれば歴史への言及となり、空間的にみれば郷土への言及となる。すなわち前者がいまを起点にしているとすれば、後者はここを起点にしているのである。」<sup>4)</sup>と谷川彰英は述べている。大切なのは現代とここである。

次に世間については『社会科教育法』のなかでくわしく説明している。

「日本語の社会という言葉は三つの意味をもっている。第一には、ワールド(world)、つまり世の中、世間を意味し、第二はソサイァティ(society)、ないしコミュニティ(communitiy)、つ

柳田社会科の成立について（第2報）

まり集団とか共同生活という意味をもち、第三にはサークル(circle)、つまりつきあい仲間といった意味に解してよいであろう。社会科もまた、この三つを含めた意味でのいわゆるソーシャル・スタディズであることは疑いないのであるが、われわれは就中『世間教育』として、社会科を理解したいと思うものである。」<sup>9)</sup>と社会科の意義を明快に示している。

表1 柳田社会科第二次単元

学年	1	2	3	4	5	6
単元	学校のまわり 道路 水 家畜 物をつくる 遊び	仲良し 川 遠い所近い所 古いもの新しいもの 郵便 仕事 火 安全	海の人たち 山の人たち 動物と植物 暦 買物と店 食べ物 丈夫なからだ 歌と言葉	友だち 私たちの町や村 産物をふやそう 本 すまいあかり 燃料 着物 交通	日本という国 人間と自然 道具のむかしと今 私たちの生活と労働 工場 私たちの生活と消費 共同生活 移住	報道 日本の貿易 世界の人々 社会と人 選挙と政治 平和 人の一生

(社会科教育法より)

表2 柳田社会科第二次単元の小単元・話題・目標 (6年単元 社会と人)

単元	小単元	話題	目標
社会と人	昔の人 村のためにつくした人  学問、芸術に励んだ人  武士のたいめんをおもんだ人  人を選ぶには	友野与右衛門 陶山鈍翁 百姓作兵衛 大原幽学 良秀 菅江真澄 高野長英 池大雅 上杉謙信 山内一豊の妻 鳥居強右衛門 あるさむらいの話	近代以前の社会と人々の行い方   人の訴を正しく批判する態度  選挙のときの態度

(社会科教育法より)

以上の原則、考え方から表1にみられる柳田社会科の第二次単元が作成されたのである。第一次単元と比較すると3年生以上の単元が相当に変わっていることが目につくが、昭和26年版学習指導要領社会科篇に示された内容を取り入れたためである。

次に表2よりわかるように柳田社会科の特色である話題＝トピックを置いたことである。数個の話題で小単元が構成され、小単元が集まって単元となっている点は形式としては特に変わったものではないが、話題の内容に民俗学の成果をとりあげてある点が注目される。

6年下の教科書『日本の社会』の巻末には「先生と父兄へ」のタイトルで7項目挙げてあるが、そのひとつに「教科はできるだけ日本民族の文化的発展のなかからえらぶようにし、それを単元のなかで生かし、日本の社会科学習にふさわしい教科書にするようにつとめました。なかでも単元『社会と人』・『人の一生』はその趣旨を十分に生かしてあります。」<sup>9)</sup>と、自信のある単元名が明示されている。

同様に3～6年の教科書に示されている民俗学の成果をもちこんだ単元は次の通りである。

- ・ 3年 こよみ たべもの うたとことば
- ・ 4年 友だち 私たちの町や村 産物をふやそう すまい、あかり、ねんりょう着物
- ・ 5年 日本という国 道具のむかしと今 共同生活 移住
- ・ 6年 社会と人 人の一生

このことについては『社会科教育法』の第六・社会科教師論のなかで次のように述べている。「この民俗学という学問は、今日伝わっている地域社会の伝承的な文化を材料として、日本人の根本的な性質などについて研究しようとする学問である。そういう目的からいえば、格別社会科と目的を一にするものとはいえないけれども、ただその方法で民俗学は多分に伝承文化を比較研究するところがあるし、どこまでも現在を立脚点として、その現在を包んでいる歴史的なものをたどっていき、さらに今日の生活のよって来るゆえんをおさえていくという行き方をとっていることからして、社会科の方法の中でずいぶん参考になる要素をもっているのではないかと思う。」<sup>7)</sup>と、社会科と民俗学について縷々説明しているのは指導する教師に是非民俗学への理解を深めてほしいと、願いを込めているのである。

## II 教科書『日本の社会』の内容

柳田社会科の特色ある単元・話題のうち、相当の激論の上取りあげられたのではないかと筆者が推測する話題がある。それは、6年下・単元「社会と人」・小単元3「学問・芸術にはげんだ人」・話題「菅江真澄」である。

表2の話題をみると柳田好みの人物が取りあげられているが、菅江真澄は民俗学に縁の深い人物であり柳田が開拓した人物ともいえる。教科書には次のように書かれている。

「菅江真澄は、今から二百年ほど前に、三河(愛知県)に生まれた人です。二十八歳のとき、郷里をあとにして、信濃(長野県)から東北地方や北海道にかけて、四十七年のながい年月を旅におくりました。真澄は行くさきざきで、こまかい日記を書きしるしました。それには、土地土地のくらしのありさまをくわしく正確に書いてあり、またけしきや風俗をうつした絵がかきそえてあります。その五十さつあまりの日記は、『真澄遊覧記』という名で知られています。

真澄は、さいごの二十年間は秋田藩内の地理を書くために努力したので、秋田県についての本が、ことに多く、書きのこされた本は、百さつにもなっています。そのころの地名のようすや、いっばんの人々のくらしぶりがよくわかるので、今でも人々から感謝されています。

真澄は旅に出ても、郷里のことをいつもわすれませんでした。郷里の友だちにだした手紙が近ごろみつかりましたが、そのなかには、旅さきでひろったすすきの葉や、つるの羽根などがはいっていました。真澄がなぜ旅に出たのか、そのわけはまだわかっていません。」<sup>8)</sup>

江戸末期の大旅行家菅江真澄については、定本柳田国男集3の『菅江真澄』の序で柳田が述べているように、大正9年の『還らざりし人』を最初にしていくつかの論文を発表しているが、社会科の教科書に取りあげた理由は明確ではない。単元「社会と人」の単元設定の理由のその三に「むかしのよう、ある英雄の出現をまっぴらに社会が飛躍するという考えから英雄にあこがれるというのは、すこぶる危険である。」<sup>9)</sup>とか、単元取扱い上の注意に、むかしの修身のように、あげた人物に右へならえをするというようなことでなく、あくまで自由に人物を批判する材料として例話をあげたものであると説明している。

さらに小単元「学問・芸術にはげんだ人」の指導の要点には、「学問や芸術のために一身の利害を超越してしごと当りつた人々の伝記を通して人間のひとつの生き方について関心を深める。」<sup>10)</sup>とあり、(傍点筆者)話題「菅江真澄」については次の二点が示されている

(1) 四十七年の長い間、家をはなれてどんな生活をしていたか調べる。

(2) 彼のしたことは、後々の世にどういふように役立ったかということから、彼の行動に

ついてみんなで批判しあう。」<sup>11)</sup>

なお参考文献としては「柳田国男 菅江真澄 創元社」<sup>12)</sup> があげられている。

以上から菅江真澄を教材としてここで取りあげた理由は、民俗学者柳田国男が日本民俗学の魁としての真澄の生き方に強い共感を抱いていたのではなかろうかと思われる。いまひとつは、民俗学発展のための将来への布石とも考えられる。

さて、この教材を小学校6年生に何を使って導入しどんな形で追求させるか考える時、むつかしい教材であり、どちらかといえば避けたい教材といえる。そのために、指導する教師に相当な力量、特に民俗学への知識関心の有無が授業の成否を決めると思われるのである。

真澄がまことに危険であり困難な旅行を、天明の大飢饉の頃の東北で続けたその根源的な情熱、真澄がとりあげた東北の農民の真実な姿、各種の具体的な民具を児童に示さなければ興味の乏しい教材になってしまうことになる。芭蕉の『奥の細道』のえがく東北が表通りならば真澄のえがく東北は裏通りであり底辺に住む人々の姿を語っているとの理解が教師に求められる教材である。

「民俗を研究する人々で、真澄遊覧記に関心をもつものは多い。幕末の東北地方の常民生活をきわめて愛情深い眼で見、体験したことを、他に類例を見ないほど詳細にしるしている点大へん教えられる。」<sup>13)</sup> と宮本常一が述べている点からも、柳田が『日本の社会』のなかへ菅江真澄をとりあげた心情がうかがえる。

この柳田社会科の特色が、反面柳田社会科の問題点となり、民俗学に関心の乏しい教師にとっては、『日本の社会』は全く扱いに困る単元の多い教科書ということになるのである。

同様なことが、6年下巻・単元「人の一生」のなかに特色ある言葉として多く見られるので次にあげておく。

- ・お七夜      ・名づけ祝い      ・氏神さま      ・氏子      ・食いぞめ      ・はつ誕生
- ・七五三      ・前がみ      ・名かえ      ・一人前      ・むすめ組      ・喜の字の祝い
- ・米寿

### III 柳田社会科の挫折

『日本の社会』が世に出た頃、全国の小学校で採択されていた社会科教科書には次のものがみられた。

- ・小学生の社会(日本書籍)      ・私たちの社会科(学校図書)      ・小学社会(教育出版)
- ・改訂新しい社会(東京書籍)      ・わたくしの社会(富士教科書)      ・小学社会科(秀英出版)
- ・あかるい社会(日教出版)      ・改訂2～6年生の社会(大阪書籍)

まさに熾烈な販売合戦が展開されていたのである。『日本の社会』は後発教科書であり、加えて実業之日本社は社会科だけしか出版していなかったという弱点を持っていたのである。

当時の小学校の児童数は約1,227万人<sup>14)</sup>である。そして『日本の社会』の採択数は表3にあるように年間を通じて16万部弱の極めて少ない数であった。当然採択された地域も狭く影響力は小さかった。

なぜ採択されなかったか原因を考えれば次の理由があげられる。まず出版社の販売力が弱くPRが行き届いていなかった。各地域の社会科研究組織との関係が薄く『日本の社会』に人気が乏しかった等であろう。

いまひとつ当時の初等教育界の流れは、戦後の混乱期を通過し反省期・転換期にさしかかっ

ていた。アメリカでの教育の現代化の動向が日本へ伝わり学力の問題とからめて論議され、他方では道德の問題が取りあげられて、社会科は学力と道德の両面からの批判を激しく受けていたのである。

昭和30年版学習指導要領の改訂は社会科一教科のみの改訂であったが、初期社会科は大きく方向を変えて系統化へ進み、昭和33年版学習指導要領の改訂により系統化は強くなり、加えて特設道德が施行され社会科の教科性は明確となった。したがって教科書の内容も当然に大きく変わり、文部省の指導性・学習指導要領の法的拘束力も強化されてきた。

『日本の社会』は採択数の少ないという面と学習指導要領の改訂という面から挫折の道を辿りはじめ、昭和34年度版を最後として以後は改訂を行わず、注文に応じて印刷する程度となり、遂に昭和38年には印刷も実施せず小学校から姿を消してしまったのである。

『日本の社会』づくりに参加した直江広治はこの挫折について、「最大の原因は民俗学的内容が濃かったため、これを使いこなす教師に問題があったと思う。」<sup>15)</sup>と内容的な理由をあげている。

同じく教科書づくりに参加した菊地喜栄治は、「教科書採用の販売圏が固定しかけており、その上社会科一種の販売拡張であったため。」<sup>16)</sup>と販売面での問題をあげている。

長浜功は「日本の社会科としての内容の適確さは認めても、入学試験に役立たないという声もあった。」<sup>17)</sup>と時の教育界の流れをあげている。

筆者は出版社の販売力の弱さと柳田社会科と地域の社会科研究組織のなじみの薄さをあげたが折角の柳田社会科が、僅か10年にして挫折したことは残念至極なことであった。

## おわりに

敗戦を契機に日本民俗学の存在理由を社会科のなかに見出した柳田国男は、柳田社会科の成立に情熱を傾注した。協力者は成城学園初等学校と民俗学研究所員であった。昭和22年の出発から6年目に教科書『日本の社会』が文部省の検定に合格し、待望の柳田社会科が成立したのであった。

しかし、教科書発行から10年目には姿を小学校から消すという経過を辿ったのである。

では柳田社会科は全く消えたかといえば否である。柳田社会科の意図に共鳴している少数の教師たちの実践にその姿を見ることが出来る。教育科学社会科教育の誌上に毎年数本の論文が発表されている。1987年度はNo296, No301, No303, No304の4冊に発表掲載されたことがこのことを証明している。

最後に学習指導要領の第5次(社会科は第6次)改訂が近く実施され、小学校低学年の社会科・理科の廃止、生活科の新設が必至の今、柳田社会科のもつ意義は何であろうか。

普通柳田社会科の特色としてあげられる、未来の予見とよき選挙民の育成は、つきつめていけば、一人ひとりの人間がいかによりよく生きていくかに繋がると思われ、ここに筆者は柳田社会科の意義があると考えている。

「柳田の八十八年にわたる生涯は、およそ知的な関心をこの世にいだきはじめた時点から、つねに未知の問題を設定して、これを突きつめようとする努力のくり返しであった。幼少期に

表3 昭和29年版『日本の社会』  
学年別採択冊数一覧表

学 年	冊 数
2 年	21,000
3 年 上	13,100
3 年 下	13,100
4 年 上	18,756
4 年 下	18,700
5 年 上	21,000
5 年 下	20,940
6 年 上	16,180
6 年 下	17,200

合 計 159,976 冊  
昭和29年10月31日現在  
(日本の社会別冊資料解題より)

萌芽していた要素が、文学、農政学、官僚生活、ジャーナリスト時代、民俗学の創造活動を経て、終始一貫通底していたのは、人間の生き方の可能性を示そうとしたことにあった。」<sup>18)</sup> という宮田登の言葉を本稿のまとめとする。

## 文 献

- 1) 柳田国男・和歌森太郎：社会科教育法，4～5，実業之日本社(1953)
- 2) 谷川彰英編；文明と伝統の授業，130，明治図書(1979)
- 3) 柳田国男；「日本の社会」6年学習指導の手引き，10～11，実業之日本社(1954)
- 4) 谷川彰英編；文明と伝統の授業，102，明治図書(1979)
- 5) 柳田国男；「日本の社会」6年学習指導の手引き，3，実業之日本社(1954)
- 6) 柳田国男；「日本の社会」6年下巻，巻末，実業之日本社(1954)
- 7) 柳田国男・和歌森太郎；社会科教育法，177，実業之日本社(1953)
- 8) 柳田国男；「日本の社会」6年下巻，26～17，実業之日本社(1954)
- 9) 柳田国男；「日本の社会」6年学習指導の手引き，104，実業之日本社(1954)
- 10) 柳田国男；「日本の社会」6年学習指導の手引き，107，実業之日本社(1954)
- 11) 柳田国男；「日本の社会」6年学習指導の手引き，108，実業之日本社(1954)
- 12) 柳田国男；「日本の社会」6年学習指導の手引き，124，実業之日本社(1954)
- 13) 宮本常一・内田武志；菅江真澄遊覧記(1)，1，東洋文庫，(1965)
- 14) 矢野恒太記念会編；数字でみる日本の100年，361，国勢社，(1982)
- 15) 柳田国男；「日本の社会」別冊資料解題，33，第一書房，(1985)
- 16) 長浜功；常民教育論，97，新泉社，(1982)
- 17) 長浜功；常民教育論，97，新泉社，(1982)
- 18) 宮田登；新日本アルバム5 柳田国男，96，新潮社，(1986)